

<b>Title</b>	巻頭言 戦後七〇年を経て思う
<b>Author(s)</b>	牛津, 信忠
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.59, 2015.3 : 3-4
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5463">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5463</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 巻頭言 戦後七〇年を経て思う

聖学院大学大学院人間福祉学研究所長  
聖学院大学人間福祉学部学部長

牛 津 信 忠

戦後七〇年という節目となる二〇一五年を迎えた。

この号は、おそらく二〇一四年度末の三月の発行となるであろうから、まさに戦後七〇年の総括の言葉や思想を探る時に産声を上げることになる。

しかし、総括とは何であろうか。締めくくりや総ざらいと言葉では言えても、あの戦後から現在に至る激変の連続には、簡単な表現では空虚さしか感じられない。

それは、破壊(ないし自滅)からの立て直しであったと一応の把握は可能であるとしても、その後の社会軸、経済軸、政治軸に根源的といえそうな問い返し、およびそれに基づく創造的展開がみられないまま現在に至っている。

かつて、エドゥアルト・ハイマン (Eduard Heimann, 1889-1967) は、資本主義や共産主義の両体制は、個別的、集団的の差異はあれども、いずれも「経済主義体制」であると位置づけ、次第に人間の善き生活、good life を体制の基軸とする「統合文化体制」へと移行していくという論を展開した。

そのプロセスには、生活者の意思を反映できる福祉国家（社会）体制や協同組合理想社会が考えられていたようである。こうした俯瞰的なもの見方は、世界に蔓延している格差社会の現実をみるにつけ、強烈な示唆となる。しかし、現代の内向きの技術的操作性に偏った状況のなかでは、かえって、現実妥当性を欠くと判断されることが多い。内向きの視座に固執していると、外をみる目も曇ってしまう。

こうした時であればこそ、ふと目を上げることが必須となる。戦後七〇年、われわれは、もう気づいてもよい。あるいはもつと根底的に体制の原点にたつて進むべき道を選び取っていくことが求められている。

われわれは、ホワイトヘッド (Alfred North Whitehead, 1861-1947) のいう「目的的自己限定」という言葉を思い出す。人間は「目的的自己限定」のもとに生きる存在である。もうそろそろ日本ないし日本人に、自らの目的を個々に問いつつ、その自己限定という行為において行為化の結果性を有機的連関のもとに吟味検討して内と外を見据えていく知力を養うことを求めてもよいのではないか。そのためには価値的存立を問う力を生活の内側から養うことが必要となる。

戦後手にしてきた価値的連鎖のいくつかの原点を大切に捉えつつ、根底的に内と外に共通の人間存在の価値的思想をもつて踏み出す基底が、この総合研究所の思索の集積から生まれていくことを改めて祈念するこの時である。